

松任谷正隆の

イ業のひとりごと

18

VOL.18 悪夢

70年代の割合初め頃、生まれて初めて映画音楽の仕事をした。

実を言えばやりたくてやったわけではなかった。

朝、知り合いのプロダクションの人から電話が掛かってきて、こんなふうに言われたのである。

「今、実は映画音楽の録音がある予定で日活のスタジオに来ているんだけど、音楽の人が逃げちゃったんだよね。

で、俺、今、針のむしろなんだ。助けてくれない？」

どうやら、当面音楽をやる予定だった人は、音楽が書けなかったのか、それとも人生が嫌になっちゃったのか、とにかく何も言わずにドタキャンをしたらしい。

仕方なしにスタジオに行って、訳も分からぬうちにやらされる羽目になった。

書き日はたった2日。20曲くらい書いて、アレンジをして明明後日ここで録音をするらしい。

映画音楽の「え」の字さえわからないまま、とりあえず書いてその日を迎えた。

スタジオはやたら大きな倉庫みたいなところで、普段はここにセットを組んで撮影をするのだろう。

ドラム、ベース、ギター、そして僕の4人には広すぎて、なんだかそれだけで滑稽だった。

監督は眼光がやたら鋭い人で、顔に大きな絆創膏を貼っていた。

目も腫れ上がっていたから最近何かがあったに違いない。

それが藤田敏八監督だった。彼は僕の音楽に喜ぶでもなく、

ダメ出しをするでもなく、なんとなくいるだけだった。

「あ、いいんじゃないですか…」程度のリアクションは

あったと思うけど…。

さすがにぶつけ仕事は悔やまれることばかり。

ああすればよかった、こうすればよかった。

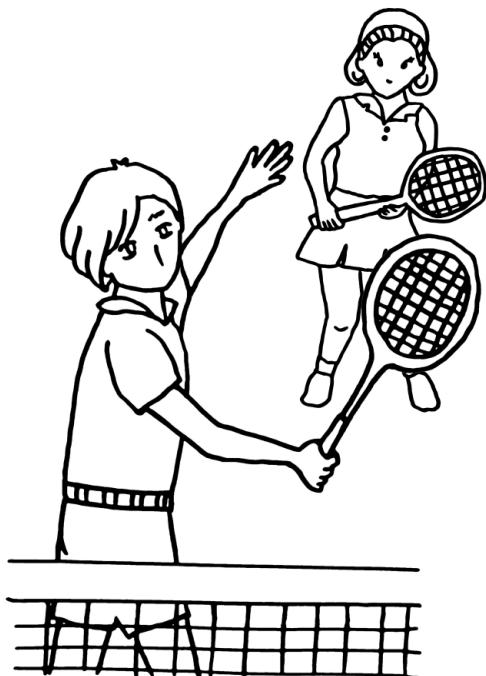
でも全て後の祭りである。

次にこういうチャンスがあるなら、と心に誓った。



チャンスは割合すぐにやってきた。今度はちゃんと僕指名で映画音楽の仕事が入ったのだ。
それが薬師丸ひろ子さん主演の「狙われた学園だった」監督は大林宣彦さん。藤田監督のまるで逆みたいな、
どうやっても怒らない感じの人で、案の定、音を録るときにはいつもニコニコして「いいですね」しか言わなかった。
さて、ここまでは前置きである。

大林監督とはその後、何度か一緒に仕事をしたが、もちろんプライベートの付き合いなんてなかった。
ところがある日、我が家に突然電話が掛かってきたのである。
「松任谷さん、テニスやりますよね？ 実は今、山中湖に来ているんですが、メンバーが足りなくて困っているんです。
助けてくれませんか？ こちらは男性が2人しか居ないので他に何人か男性がいると助かるのですが・・・」
僕は我が家に入りしていた当時大学生だった2人の男子を誘って、山中湖まで出かけた。
どうやらそこは、大林監督の知り合いの年配の女性の別荘らしく、テニスコートが4面くらいあって、
コートはその人の敷地だったのか、貸し切っていたのか（・・・今となっては誰も分からぬ）大勢の年配の
女性達がキャアキャア言って、まるで女子高生の集いみたいになっていた。



20代の我々は圧倒され、口数も減った。そうそう、圧倒されて
いたのは僕たちだけではなかった。大林監督も、それからそこに、
あの怖い顔をした藤田監督も一緒だったのである。

藤田監督がテニス・・・・あまりにミスマッチな光景だった。
訳も分からぬうちに日は暮れ、僕たちは別荘に拉致された。
木造のいわゆる別荘別荘した作りの家だった。
「みんなで大きな部屋で一緒に寝ましょうよ」と
一番年配と思われる女性が言った。もじもじする2人の監督。
「すみません、こいつらいびきが大きくて皆さんに迷惑を
おかけするといけないので」と、僕はやんわりと断り、
学生2人と3畳間みたいな狭い物置部屋に立てこもり、
内側から鍵をしっかりと掛けて寝た。
翌朝、学生2人と話をしたらみんな同じような夢を見たらしい。
もちろん、年配の女性達に襲われる夢だ。



松任谷 正隆（まつとうや まさたか）

作編曲家、音楽プロデューサー。
4歳からクラシックピアノを習い始め、14歳の頃にバンド活動を始める。
20歳の頃プロのスタジオプレイヤー活動を開始し、
バンド“キャラメル・ママ”、“ティン・パン・アレイ”を経て、数多くのセッションに参加。
その後アレンジャー、プロデューサーとして多くのアーティストの作品に携わる。
鈴木茂、小原礼、林立夫とともにバンドSKYEを結成。
2021年10月、デビューアルバム「SKYE」をリリース。
日本自動車ジャーナリスト協会に所属し、「日本カー・オブ・ザ・イヤー」の選考委員も務める。
著書に「松任谷正隆の素」「おじさんはどう生きるか」などがある。